

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第427次発掘調査報告書 —



調査区全景（北東上方から）

2020

姫路市教育委員会

1 調査に至る経緯・事業の経過

姫路市紺屋町 29・30・31 番地における店舗建設について、株式会社山田屋制服 代表取締役 山田一博から姫路市教育長宛に文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘届出書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号 020169）に該当している。姫路市教育委員会生涯学習部文化財課で遺跡の取扱いについて事業者と協議を行い、事業地内の遺跡の状況を把握するために、令和元年 7 月 23 日に確認調査を行った（遺跡調査番号 20190187・姫路城跡第 426 次調査）。その結果、設定した 2 箇所の調査区ではいずれも後世の攪乱を受けているものの、現地表下 50～70 cm で基盤層を確認するとともに、江戸時代の遺構または包含層とみられる土層を検出した。

事業地内に遺構が保存されていることが判明したため、建設工事により遺構が影響を受ける範囲を対象として本発掘調査を実施することとした。調査対象面積は 88 m²である。本発掘調査に当たっては、令和元年 8 月 2 日付で事業者と姫路市が委託契約を締結し、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが現地調査及び出土品整理作業等を実施した（遺跡調査番号 20190257・姫路城跡第 427 次調査）。

現地調査は令和元年 8 月 20 日に開始し、8 月 30 日に終了した。現地調査終了後、埋蔵文化財センターにおいて出土品整理作業等を行い、発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。現地調査及び出土品整理作業の体制は下記のとおりである。

姫路市教育委員会事務局

教育長 松田克彦
 教育次長 坂田基秀
 生涯学習部長 沖塩宏明

文化財課

課長 花幡和宏
 課長補佐 大谷輝彦（調整）
 技術主任 関 梓（調整）

埋蔵文化財センター

館長 前田光則
 課長補佐 岡崎政俊（庶務）
 職員 竹井宏文（庶務）
 係長 森 恒裕（本発掘調査担当）
 技術主任 小柴治子（確認調査担当）

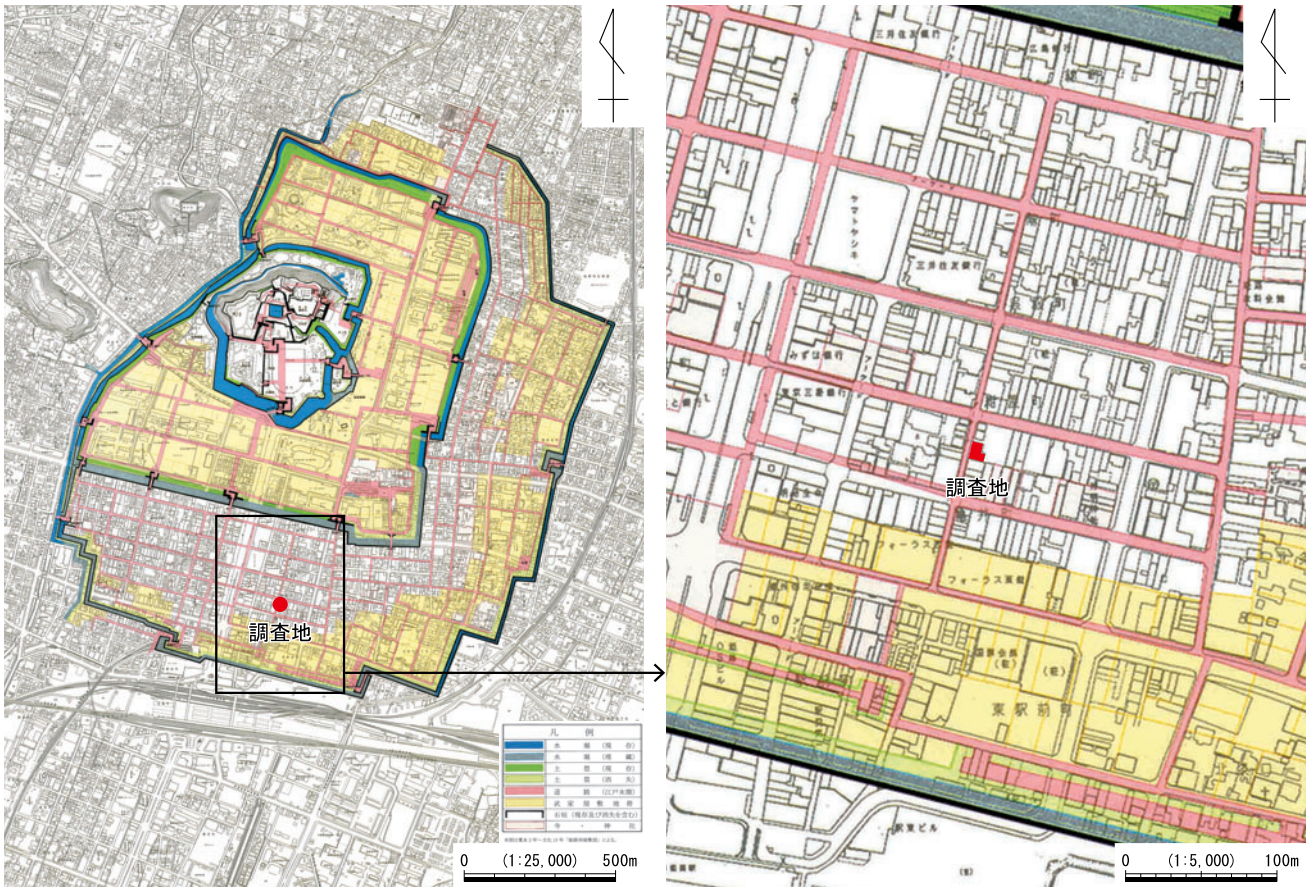


図1 調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』を一部改変・加筆）

2 調査地の位置

今回調査を行った姫路市紺屋町は、姫路城大天守から南へ約 1 km、外曲輪南部に位置する（図 1 左図）。周辺は市の中心市街地であり開発が著しいが、基本的に江戸時代の町割りを今日まで踏襲しており、調査地の西・南・北の道路はいずれも江戸時代後期・酒井氏時代の城下町絵図『姫路侍屋敷図』（寛延四年～宝暦四年・1751～1754）に描かれた街路と一致している（図 1 右図）。

次に、『姫路市史』第十巻及び第十一巻上の付図に収録された城下町絵図によって、調査地周辺の変遷を概観したい。

池田氏時代の絵図には外曲輪が描かれていないため、城下町成立期の状況は不明であるが、第一次榊原氏時代（慶安二年～寛文七年・1649～1667）の『姫路御城廻侍屋鋪新絵図』によれば調査地は町屋であり、「紺屋町」街区の南西隅付近に比定される。この絵図では「紺屋町」の南は「こてや町」（小手屋町）、西は「ぬしや町」（塗師屋町）になっているが、第二次松平氏時代（寛文七年～天和二年・1667～1682）の絵図では「紺屋町」が「東こんや町」、「ぬしや町」が「西こんや町」に改称されている。調査地は「東こんや町」（東紺屋町）の南西隅に該当する。さらに第二次榊原氏時代の宝永八年（1711）の絵図では南の「こてや町」が「カメイ丁」（亀井町）に変わるなど、周辺の町名に変遷は認められるが、前述のとおり基本的な町割りの構造は変化していない。なお、現在の紺屋町は昭和 59 年（1984）の区画整理時に再編されたもので、江戸時代の「東紺屋町」・「西紺屋町」とは区域が異なる。

江戸時代における調査地の詳細な様相は不明であるが、南接する「亀井町」については、文久二年（1862）の「亀井町絵図面写」が残っている（『姫路市史』第三巻付図「姫路城下諸町絵図集」所収）。『姫路侍屋敷図』等の城下町絵図にも描かれた寺院を除けば、東西街路を挟んで南北に細長い町屋敷が立ち並んでいる。紺屋町域も同様の様相であったと仮定すれば、調査地は北の東西街路側を正面とする町屋敷の裏手に該当する可能性が高い。

3 調査の成果

(1) 調査方法

確認調査時の土層観察によれば、後世の攪乱土が比較的深い位置まで及んでいる箇所が認められ、基盤層より上部では確実な遺構面を把握できなかった。このため、確認調査で現地表下 50～70 cm で検出した黄褐色シルトないしは砂礫からなる基盤層上面を調査面とした。

調査面上部の盛土・攪乱土等を重機により除去するとともに、遊離遺物の採集に努めた。調査面及び調査区壁面の精査、遺構発掘は人力で行い、写真撮影・実測等の記録保存を適宜実施している。

(2) 基本土層・遺構の分布

調査区の平面図及び西壁・北壁の土層断面図を図 2 に示した。

調査区南西部では現地表下約 40 cm（標高 11.6 m 前後）で黄褐色シルトの基盤層に達するが、その直上付近まで近現代の盛土が及んでおり、近世の整地層は部分的に厚さ 10 cm 程度を残すのみである（西壁 28 層）。なお、西壁には基盤層を掘り込む複数のピットが観察されるが、調査区内ではほとんど検出していない。いっぽう北西部では SK2・16 など、検出部の最大長が 1 m を超える比較的大型の遺構がみられる。上部は近年の攪乱によって失われているが、西壁の土層を観察するかぎり、これらの遺構の掘込み面は標高 11.6 m 以上に位置したものと想定される。

北壁では、現地表下 20～35 cm（標高 11.75～11.9 m）前後で厚さ 10～25 cm の黄灰色土層（北壁 6・7 層）を確認した。近現代の盛土・攪乱土の直下にあり、厳密な時期の特定はできなかったが、近世に遡る整地層等の可能性も否定できない。さらに下部には、薄い黄褐色シルト質土層（8 層）を挟んで、厚さ 20～40 cm の褐灰色土層（22 層）が認められた。調査区北西隅で検出した SK1（9・10 層）、北東部の SK15（4 層）はいずれも本層の上面から掘り込まれている。調査区北部では、現地表下 65～85 cm（標高 11.35～11.5 m）前後で基盤層に達する。

調査区南東部には、SK22・24・25・26・27 等の土坑が集中している。南壁の土層観察により、18 世紀後半に比定される SK27 の掘込み面が標高 11.7 m 以上に位置することが判明した。西壁・北壁の状況を勘案すれば、調査地内では少なくとも江戸時代後期の生活面は現地表面（標高 12.0～12.2 m）とさほど異ならない高さにあったものと考えられよう。なお、調査区南東部の基盤層検出面は、標高 11.25 m 付近であった。

以上のとおり、調査地における基盤層検出面は南西部が最も高く、北及び東に向かって下降している。また、姫路城城下町跡の発掘調査でしばしば確認される城下町形成以前の耕作土をはじめ、確実に近世より遡る土層は、今回の調査では検出しなかった。近年の攪乱により本来の土層が失われた部分も多いが、前述した北壁 6・7 層及び 22 層を近世に形成された土層と認定するならば、調査地周辺では近世段階で盛土や整地を伴う造成が繰り返し実施された可能性が高く、この時点で古い時期の遺構や遺物包含層が削平されたものと考えられる。

(3) 遺構・遺物

今回の調査で検出した遺構は土坑を主とし、町屋の構造に直接関連する建物礎石や庭園施設等は見つかっていない。ただし、前述のとおり遺構面の大部分は攪乱を受けていると考えられるため、保存されていた遺構は基盤層に達する深い掘込みを伴ったものに限られていることを明記しておく。

〔土坑〕

SK11 調査区東端部で検出した。平面は略円形で、検出部の最大径 74 cm・深さ 12 cmを測る。南側の SK23 を切る。埋土は黄灰色土で、円礫や炭とともに貝殻片を大量に包含する。遺構の規模に比して遺物がまとまって出土しており、廃棄土坑と考えられる。肥前磁器染付碗(図 3-1)・染付猪口(2)、肥前陶器刷毛目鉢(3)、信楽焼壺(4)、関西系焼締陶器播鉢(5・8)、備前焼播鉢(6)、丹波焼播鉢(7)、土師器壺(9)を図示した。これらの出土遺物の年代観は概ね 18 世紀代に収まるものである。

SK15 調査区北東部の壁際に位置し、後述する石樋遺構の下で検出した。平面は楕円形で、検出部の長径 60 cm・短径 56 cm・深さ 30 cmを測る。遺構底部に土師器壺(図 3-11)が正位で据えられていた。内面が煤で黒化しており、火消壺と考えられる。肥前磁器染付碗(10)は 18 世紀前～中葉に生産されたものであろう。

SK20 調査区中央やや南西寄りで検出した(写真 1)。17 世紀後葉から 18 世紀前葉にかけての遺物が出土した SK17 に切られる。平面はいびつな略円形で、検出部の最大径 300 cm・深さ 30 cmを測る。埋土は 3 層に分層でき、最下層にはハマグリ等の貝殻や獣骨を包含する締りの悪い褐色土層が認められた。同層からは土師器壺 1 個体が完形に近い形で出土した(写真 2・図 3-18)。口径 22.7 cm・体部最大径 25.0 cm・器高 7.8 cmを測り、体部は内湾しながら比較的高く立ち上がり、下半にわずかながら平行タタキ跡を残す。共伴する遺物には肥前陶器碗(12・13)、土師器盤(14)、底部糸切りの土師器皿(15～17)のほか、小片ながら備前焼壺、肥前磁器瓶、青花碗等がある。埋土及び出土遺物の様相から、本遺構は 17 世紀中葉～後葉を下限とする廃棄土坑と評価しておきたい。

SK25 調査区南東部で検出した円形の土坑で、検出部の最大径 110 cm・深さ 20 cmを測る(写真 3)。出土遺物のうち、施釉陶器片口壺(図 4-19)、丹波焼甕(20)、土師器壺(21)を図示した。21 はほぼ完形に復元でき、復元口径 26.3 cm・器高 6.3 cmを測る。SK20 出土資料(図 3-18)と比較すると、体部外面のタタキ跡が消失するとともに、体部が直立し扁平な器形をもつ。18 世紀代に降る資料と考えられる。

SK30 SK25 の北東約 2.5 mで検出した略円形の土坑で、検出部の最大径 80 cm・深さは 32 cmである。埋土は円礫、瓦片、貝殻等を包含しており、廃棄土坑と考えられるが、10～15 cm大の鉄滓が数点出土していることが注目される。出土遺物のうち、肥前磁器染付碗(図 4-22)・染付皿(23)、関西系焼締陶器播鉢(24)、丹波焼甕(25)を図示した。これらの遺物は概ね 18 世紀前～中葉に比定される。ただ、小片のため図化しなかった遺物の中に口縁内面に四方襷文帯を描いた肥前磁器の青磁染付碗があり、別遺構からの混入でないとすれば、SK25 等よりやや時期が降った遺構である可能性を指摘できよう。

〔その他の遺構〕

石樋遺構 調査区北壁に掛かった状態で検出した(写真 4)。全容は不明であるが、断面を凹字形に加工した石材を横向きに据え付けている。石材は検出部の最大長 50 cm・幅 25 cm・高さ 22 cmで、上面の抉込は幅 14 cm・深さ 8 cmを測る。直下にレベル調整用と思われる扁平な河原石を伴う。また、周囲には 20 cm大以上の石材が集まっており、原位置を保っていないまでも本遺構に関連する可能性が高い。掘方はなだらかな U 字形で、北壁 6 層を切っている(図 2)。近代以後に降る遺構である可能性も否定できないが、町屋内の導水・排水に関連した施設の一部と想定しておきたい。

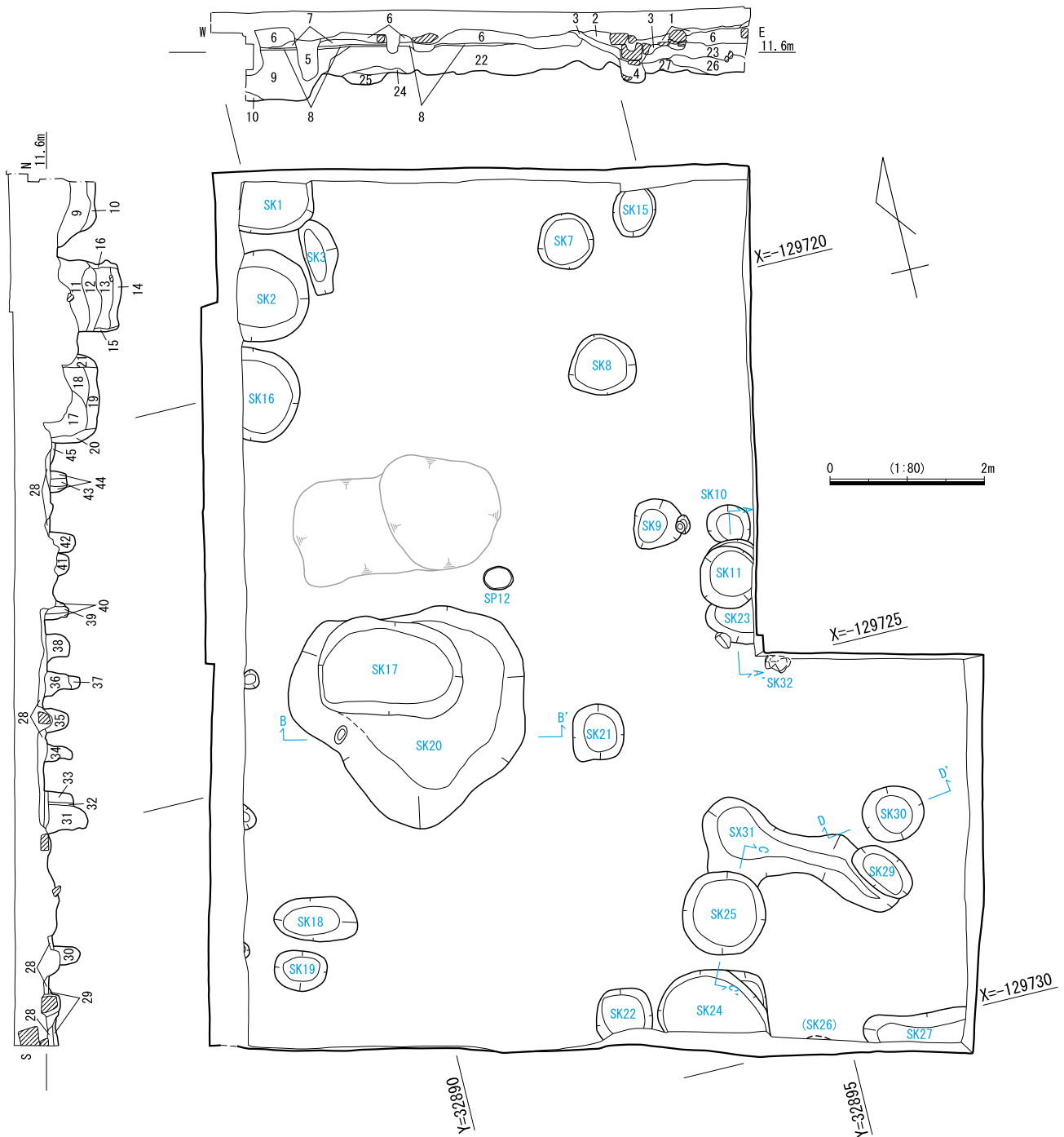
埋甕遺構(SK32) 調査区東端の屈折部で壁面に掛かった状態で検出した(写真 5)。丹波焼の甕を正位置に据え付けており、上部は攪乱を受けているが漆喰が塗られていたようである。甕の口縁部がほとんど残存していないため、正確な年代比定は困難であるが、18 世紀以降の便所遺構である可能性が高い。

漆喰塗り遺構(SK7) 調査区北東部で検出した直径 72 cmの円形の土坑で、底部全面に漆喰を塗っている(写真 6)。埋土にも大量の漆喰片を包含しており、便槽と思われる。埋土中から施釉陶器碗、瓦片等が少量出土した。

ピット 調査区西壁で約 10 基のピットを確認した。埋土は暗灰黄色細砂で、検出部の幅 20～35 cm・深さ 20～55 cmを測る。近世の整地層と判断した西壁 28 層の下で検出したことから、江戸時代以前の遺構である可能性が高い。

4 まとめ

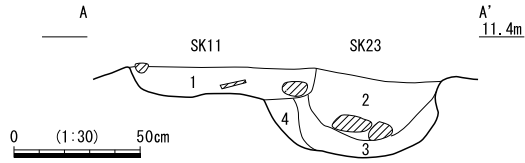
町屋の構造を示す遺構は検出なかったものの、絵図等における位置や、多くの廃棄土坑が掘られていることを勘案すれば、調査地は町屋裏手の空闲地部分に該当する可能性が高い。なお、検出した土坑の時期は概ね 17 世紀後半から 18 世紀代に集中しており、確実に幕末期に降るものは認められなかった。江戸時代後期の生活面は現地表面と大きく異ならない位置にあったとみられるため、既に失われた遺構が多いと考えられるものの、時期による遺構数の偏りが町屋内における土地利用状況の変化を反映していることも想定できよう。



- | | | |
|---|--|-------------------------------|
| 1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：瓦片、15cm以下の礫、漆喰片等を大量に含む。 | 16. 2.5Y5/1 黄灰色シルト | 31. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 |
| 2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：きめの粗い砂粒を含む。 | 17. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 | 32. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |
| 3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト：黄褐色土をブロック状に含む。 | 18. 2.5Y5/4 黄褐色細砂 | 33. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：地山ブロックを含む。 |
| 4. 10YR4/1 褐灰色シルト：10cm大以下の円礫を多く含む。 | 19. 2.5Y5/4 黄褐色細砂 | 34. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：地山ブロックを含む。 |
| 5. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト：風化礫を少量含む。 | 20. 2.5Y5/4 黄褐色粗砂 | 35. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |
| 6. 2.5Y5/1 黄灰色シルト：黄褐色土小ブロック、炭、漆喰片を少量含む。 | 21. 2.5Y5/6 黄褐色粗砂 | 36. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：礫を含む。 |
| 7. 2.5Y6/1 黄灰色シルト：5cm以下の黄褐色土ブロックを大量に含む。 | 22. 10YR4/1 褐灰色シルト：3～10cm大の礫、炭をわずかに含む。 | 37. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |
| 8. 2.5Y5/4 黄褐色シルト | 23. 10YR4/1 褐灰色シルト | 38. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 |
| 9. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト：黄褐色土小ブロックを含む。 | 24. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト：黄灰色土が混入、貝殻を含む。 | 39. 2.5Y5/1 黄灰色細砂 |
| 10. 2.5Y5/1 黄灰色細砂 | 25. 2.5Y5/1 黄灰色シルト：貝殻を少量含む。 | 40. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂：地山ブロックを含む。 |
| 11. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 | 26. 10YR3/1 黒褐色シルト：3～5cm大の円礫を大量に含む。上半に貝殻を含む。 | 41. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂：炭をわずかに含む。 |
| 12. 2.5Y5/6 黄褐色細砂～シルト | 27. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト：黄褐色土ブロックを含む。 | 42. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |
| 13. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：黄色土ブロックを含む。 | 28. 2.5Y4/2 暗灰黄色～5/2 暗灰黄色細砂：近世整地層。 | 43. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 |
| 14. 2.5Y5/6 黄褐色細砂 | 29. 2.5Y4/1 黄灰色細砂 | 44. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |
| 15. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト | 30. 2.5Y5/3 黄褐色シルト～細砂 | 45. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 |

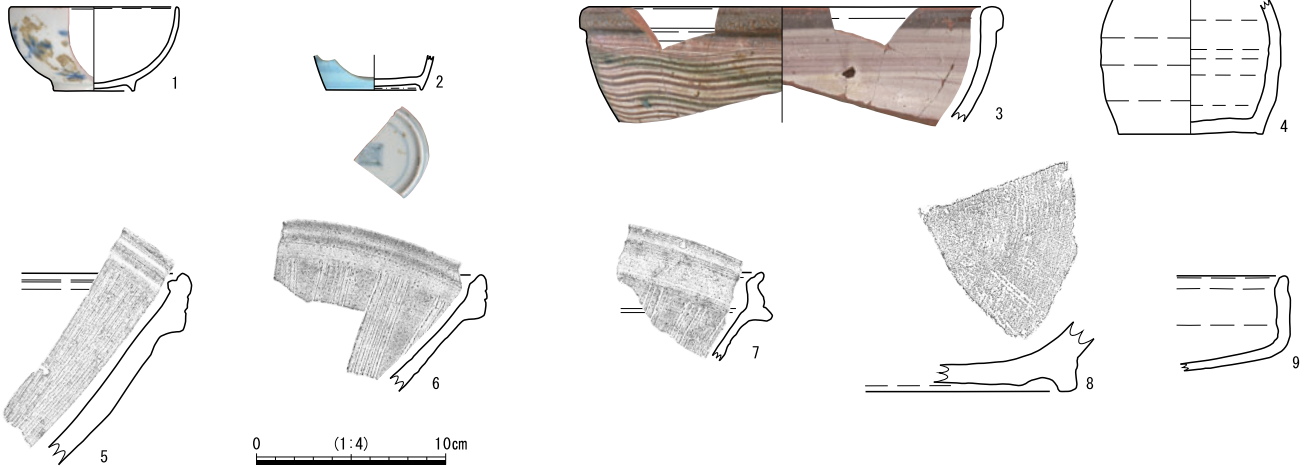
図2 調査区 平・断面図

SK11・SK23

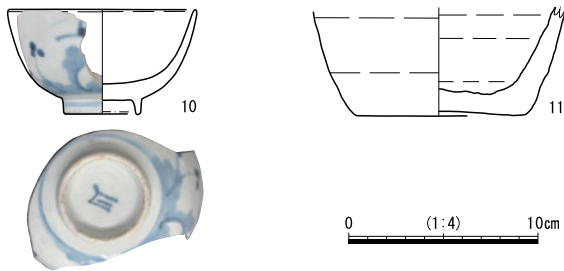


1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：3～5cm 大の円礫、炭を含む。貝殻を大量に含む。
2. 2.5Y6/2 灰黄色シルト：黄褐色小ブロックを含む。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト
4. 2.5Y6/2 灰黄色シルト：黄褐色土小ブロックを含む。

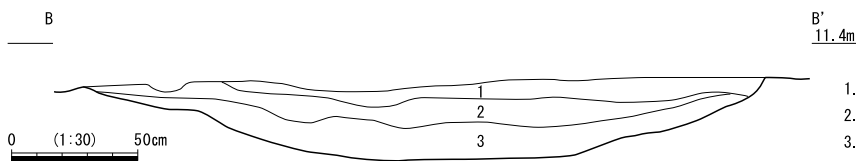
SK11



SK15



SK20



1. 2.5Y4/1 黄灰色シルト：炭をわずかに含む。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト：黄褐色土小ブロックを多く含む。
3. 10YR4/1 褐灰色シルト：貝殻を多く含む。

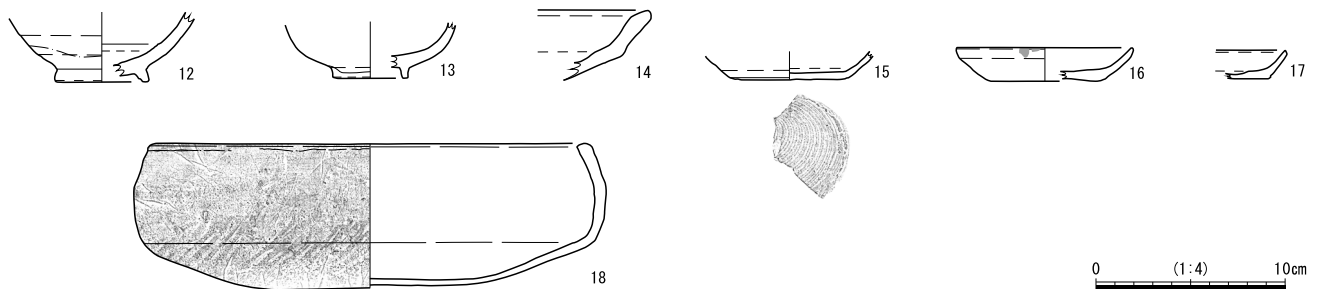
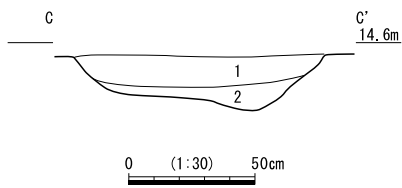
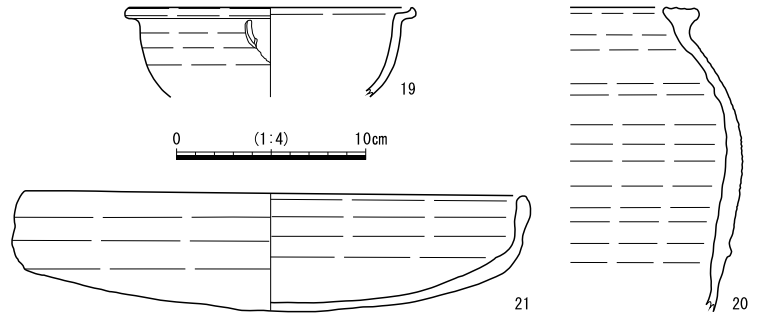


図3 遺構断面図・出土遺物実測図 (1)

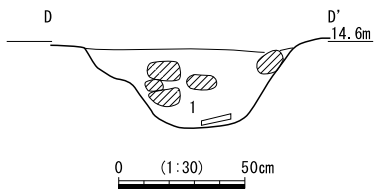
SK25



1. 10YR4/1 褐灰色シルト：10 cm大以下の円礫、瓦片を含む。粘性あり。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト：粘性あり。



SK30



1. 10YR4/1 褐灰色シルト：15cm 大以下の円礫、瓦片、貝殻等を大量に含む。

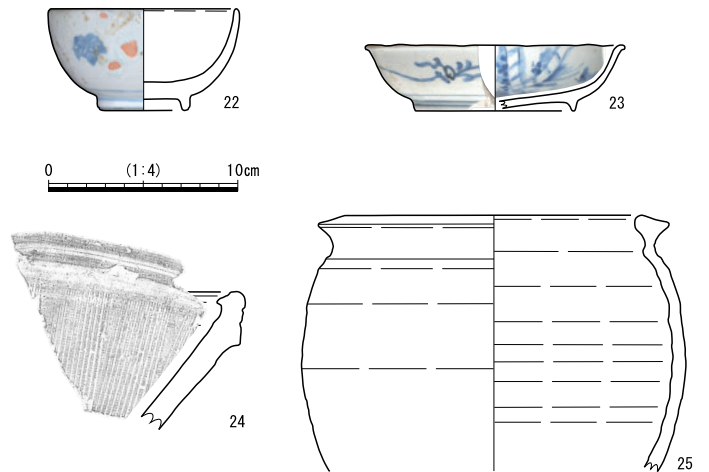


図4 遺構断面図・出土遺物実測図 (2)



写真1 SK20 (南東から)



写真2 SK20 土師器堀出土状況



写真3 SK25 (西から)



写真4 石樋遺構 (南から)



写真5 埋甕遺構 (SK32) (南から)



写真6 漆喰塗り遺構 (SK7) (南から)

報告書抄録

ふりがな	ひめじょうじょうかまちあとーひめじょうあとだい427じはつつちょうさほうこくしょー							
書名	姫路城城下町跡 ー姫路城跡第427次発掘調査報告書ー							
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第104集							
編著者名	森 恒裕							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1				TEL (079) 252-3950			
発行年月日	令和2年 (2020年) 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじしこんやまち 兵庫県姫路市紺屋町 29・30・31番地	28201	020169	34° 49′ 48″	134° 41′ 34″	2019. 8. 20 ～ 2019. 8. 30	88㎡	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			遺跡調査番号	
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	土坑・ピット	土師器・陶磁器			20190257	
要 約	調査地は姫路城外曲輪南部に位置する。検出した遺構は17世紀後半から18世紀代の廃棄土坑を主体とし、町屋裏手の空閑地に該当する可能性が高い。土層の状況から、調査地では整地等が繰り返行われたと考えられ、江戸時代後期の生活面は現地表に近い高さに位置したとみられる。							

例言・凡例

1. 本書は、姫路市紺屋町 29・30・31 番地で実施した姫路城城下町跡 (県遺跡番号 020169) の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は店舗建設工事に伴い、株式会社山田屋制服 代表取締役 山田一博との委託契約に基づき姫路市が実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センター (姫路市埋蔵文化財センター) が担当した。
4. 調査区平面図の作成には世界測地系を使用し、方位は全て座標北とした。また、標高は東京湾平均海水準 (T.P.) を基準とした。
5. 土層の色調は、『新版標準土色帳』(1999 年度版) に準拠した。
6. 遺構番号は遺構種に関わらず通し番号を付したが、調査の進捗に伴って欠番となったものがある。遺構の略称は次のとおりである。 SK: 土坑, SP: 柱穴・ピット, SX: 性格不明
7. 本書に係る調査記録・出土遺物等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 遺物の年代比定には主に次の文献・論文を参考にした。
 - ・大橋康二 1989『肥前陶磁』(考古学ライブラリー 55) ニュー・サイエンス社
 - ・九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』(九州近世陶磁学会 10 周年記念)
 - ・白神典之 1992『堺摺鉢考』『東洋陶磁』第 19 号 東洋陶磁学会
 - ・中川 猛 2012『炮烙考ー姫路と周辺の炮烙についてー』『山口大学考古学論集』(中村友博先生退任記念論文集) 中村友博先生退任記念事業会
 - ・乗岡 実 2002『近世備前焼摺鉢の編年案』『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第104集

姫路城城下町跡 ー姫路城跡第427次発掘調査報告書ー

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246
兵庫県姫路市四郷町坂元 414番地1

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501
兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発 行 日 令和2年 (2020年) 3月31日

印刷・製本 松尾印刷株式会社
〒671-0222
兵庫県姫路市別所町小林494